子規全集

第十四卷　評論　日記

講談社

N. D. C. 910　696 p　20 cm

子規全集　第十四卷
評論　日記

定價　參千六百圓
昭和五十一年一月二十日　第一刷發行

著者　正岡子規
代編表集　正岡忠三郎
發行者　野間省一
發行所　株式會社　講談社
東京都文京區音羽二―一二―二一
電話　東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)
郵便番號　一一二　振替　東京三九三〇

印刷所　株式會社　精興社
製本所　大製株式會社
本文用紙　三菱製紙株式會社
©正岡忠三郎　一九七六年
落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

0395-417147-2253(0) (子規)　Printed in Japan

評論日記

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

目次

評論

我邦に短篇韻文の起りし所以を論ず……九
文學雜談……一七
文界八つあたり……二一
春色秋光……五一
文學漫言……七五
朗詠に就きて……一〇四
再び朗詠に就きて……一〇五
五大畫家盲評……一〇七
逍遙遺稿の後に題す……一一〇

めさまし草卷一批評……一一
桐一葉……一一五
作家評家……一一八
戯曲類と四季……一二一
文學……一二八
服制と美術……一九三
詩董狐を讀む……一九六
若菜集の詩と畫……一九九
墨のあまり……二〇二
美術學校を如何すべき……二〇七
美術學校に就きて……二一一
文學美術評論……二一四
早稲田文學廢刊　寫生、寫實　他
强き和文……二二一
「我國の繪畫に就きて」を讀む……二二四

「我國の繪畫に就きて（再）」を讀む……二三八
敍事文……二四一
有神疑義を讀む……二五〇
水滸傳と八犬傳……二五三

日記

獺祭書屋日記……二九五
病床日誌……三五七
病牀手記……四〇一
病牀讀書日記……四六一
〔斷片〕……四六九
〔手記〕……四七一
〔病牀の芍藥〕……四七三
菓物帖……四七四
草花帖……四七八

〔玩具帖〕……四八一
藏書目錄……四八三
參考資料……五九九
解題　本林勝夫……六四五
解說　大岡昇平……六八三

評論

編注

本卷は評論・日記・藏書目錄の三部からなる。「評論」篇では明治二十五年の「我邦に短篇韻文の起りし所以を論ず」以下三十三年の「水滸傳と八犬傳」に及ぶ長短二十七篇（中には時評風の短文や「寫生、寫實」等を「文學美術評論」の題をとつてまとめたものもある）を發表時の署名とともに年代順に收錄した。直接短歌・俳句に關するもの以外を收めるが、廣く文學・美術等の領域にあいわたる評論は、子規文學の廣大な裾野を示すとともに、歌論・俳論・隨筆等の諸卷とあいまつてその事業における多彩な活動を示すものとなつている。特に、子規の革新運動の底邊をうかがう上でも重要な諸論をふくんでおり、これらを通じての評論活動の意義の大きさを如實に示している。なお、本卷中〔〕をつけたものは編者によるものである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

我邦に短篇韻文の起りし所以を論ず

正岡子規

「日本は美術國なり」とは方今世界に傳稱する通說なるが如し、扨我邦は何故に美術國となりたるかと問ふに基礎となるべき原因二あり、夫れ天下有用の事物は皆人間に快樂を與ふる者なり、而して之を分ちて積極的快樂及び消極的快樂とす、消極的快樂は害を除き痛を去るの謂にして生命財產の安全を保護し飢渴を醫し疾疫を驅除するが如き皆是れなり、されば一國の政治をはじめ農工商醫の職にある無數の人間は盡く社會の爲に此消極的快樂を與ふるものに外ならず、之に反して積極的快樂とは直接に人間の身心に向つて多少の快樂を與ふる者にして無聊を慰し鬱悶を開き更に精神をして爽快の度を增加せしむるの謂なり、而して美術は卽ち此效能を有する隨一のものとす、此二者は並行せざるべからざるものにて若し其一を廢すれば人世は徒に競名爭利の亂國となるか又は兩者共倒れの運命を見るに至るべし、されども兩者若し孰れをか先にすべきと問はゞ普通の人情として先づ消極的快樂を求め得て而して後に積極的快樂を受け得べきが故に一國の綱紀紊亂して人民皆餓虎の餌を爭ふが如き境遇にある時は決して美術の妙味を知ること能はず、從つてこれを發達せしむるの機會をも得ざるなり、然るに我邦は上古より今日に至るまで君君たり、臣臣たるの義氣あるが

爲に上下の結合甚だ親密にして臣民、周鼎の輕重を問ひ夷蠻幾世の金甌を損ずるが如き憂なく四海浪穩かに千秋萬歲をのみ謠ひしが上に、かてゝ加へて外國との交通を絕ち、しかも我一島國の內にて衣食住豐かに生計の用を充たすことを得しかば我邦の人民は古來より消極的快樂を得ること實に十分なりしなり、衣食足りて禮讓起り恆產ありて恆心あり、消極的快樂充たされて積極的快樂發達するものとせば我邦が美術の盛運を極めしは怪しむに足らざるなり、是を第一の原因とす、

人性は遺傳の原質ありて敎育は以て其原質を琢磨するものなり、而して其敎育の過半は庠序學校にあらずして周圍の形勢にあり、又此人を鑄冶する周圍の形勢といふも必ずしも一家の狀況、一市の風俗にあらずして其住居する土地の形勢風光に關する者亦多からんと思はる、名山大〈嶽〉巍峨として蒼空を衝くの邊に雄偉魁梧の英傑を出だし池沼淸漣を蹙め花草幽香を吐くの中に溫柔孱弱の人物多きを見ば我邦に美術の發達したる誠に其故ありと謂ふべし、夫れ我國の地たる到る處として絕風光ならざるはなく、美術文學の好材料は帽邊鞋頭皆是なり、山あり奇にして秀、水あり淸にして快、草樹樸茂朱塔白幣其間に隱現し禽鳥喈々草屋柴扉三々相接す、況や富士の百景、琵琶の八勝は變幻の妙を極め松嶋の婉麗、耶馬溪の雄奇、美を東西に爭ふ、須磨明石の靑松白沙は幾多雅客の足跡を印し武藏野の秋花新月は古今歌人の幽懷を寄す、樹に松あり草に竹あり、之を植ゑて楚々愛すべく之を伐りて百器を製すべし、若し夫れ春風駘蕩の間に櫻花煥發し白雲を飛ばし香雪を翻すに至りては如何なる無風流漢といへども美術の觀念を發せざる者あらんや、是を第二の原因とす、既に此二原因ありて以て美術國の基礎をなすにより我邦人の美術思想は常に之を有形の美術に現象せ

しめんとの傾向を有せり、而してこれが爲に機會を與へたる者は一二にして足らざるべしといへども佛敎の傳播、漢詩の渡來等は著しく其發達を促したるが如し、美術已に然り、是を以て美術の一部分として尤も效用ある文學（少くとも美術と趣を同じくする文學）も亦勢、發達せざるを得ざるに至れり、

文學の發達は其始め散文より起らずして却りて韻文を以て第一着となすは諸國皆同一揆に出でたるが如し、（韻文と散文との區劃は敢て判然たるべきものに非ずと思惟すれどもこゝには普通の詩歌俳句を指す故に誤解を來たすことなかるべし、又韻文以外の文學は要なければ論ぜず）是れ其音調の耳を樂しましめ隨つて人をして感動し易く記臆し易からしむる爲に起りし者なるべく、そは俗諺卑語の間に一種の音調を備ふる者多きを見ても知るべきなり、我邦の韻文は神代に在りて既に粲然見るべきの發達を爲したるが如くなれども史傳の載する所皆口碑より收拾せしものなれば盡く信ずるに足らず、下りて奈良朝に至りては韻文（卽ち和歌）大に隆盛を極め上流下流を問はず一般に吟詠せしものと見え萬葉集に錄する長歌短歌のみにても其の數甚だ多く、且つ其體裁も大に備はりたるを見る而して體裁の完備と同時に其格調略一定に歸して十中八九は五言七言の配合に止まり其敍述の方法も長歌は多く對句を取るの慣習を成したり、然れども長歌の前途猶大に望を屬すべきもの少からず、我邦の韻文はこれより益進歩して長篇大作も續々世に現はれんとこそは見えたれ、何ぞ計らん僅々數十年を經過したる平安朝に於て三十一文字の短歌のみ痛くもてはやされ、彼長歌なるものは寥々として晨星の如く爾後一千年を經過するの今日迄終に其發達を逞くするを得ざりき、

扨右の如く長歌全く壓せられて短歌獨り勢を得るに至りしは必ず其原由なくんばあらず、請ふ試みに之を論ぜん、

苟くも一國をなす、而して多少の美術文學無き者は未だ之れ有らず、然れども我邦の如く上古より美術思想に富む者は亦應に尠かるべし、これ蓋し前に述べたる如く天下安穩にして內訌外患の虞少きと山水明媚にして美術思想を惹起し易きとの二原因ありてこれが基礎を爲すに由るものならんか、而して熟ら此二原因が如何にして吾人の美術思想の上に働くかを見るに此二原因は直ちに一二の大美術家を生じ三四の大文學者を興すべきものにあらずして却りて多數の小美術家を養成し多數の小文學者を呼動したるが如し、是に於て門閥を以て朝廷の虛位を抱き天下事なくして無聊に堪へざる幾多の月卿雲客は文學（韻文）を以て其遊技となし終には之を目して一個の必要なる資格と爲すに至れり、眞成の美術家文學者は如何なる邦國に生るゝとも如何なる時世に遭遇するとも卓然として獨立する所あり、千艱萬難を排し制度拘束の外に縱橫驅馳して以て其大業を成し大名を博するものなれども文恬武熙の間に成長し少しも外部の刺激反動を受けざる我邦の公卿は單に作歌を以て己れの娛樂に供せんとするより終に題詠又は歌合せの類大に行はれて、長くして詠み難き長歌は全く之を廢し短くして吟じ易き短歌のみ專ら世に殘りたり、是に至りて我邦の韻文は全く公卿社會の手に落ちて文弱の餘弊は後世に至るまで免ることを得ざりき、而して上流社會に在りては和歌は最早一種專門の技藝に非ずして一般普通の遊技と變じ韻文といふ名目は僅かに三十一字の天地に包含せらるゝに至り其結果は終に淺薄と陳腐の間に彷徨するの悲しむべき運命に陷りたり、之を譬へば

平原曠野の中に沼澤多く散在し時として一望際無き程の水面を現出すといへども其水底は實に淺くして到る處歩行渡りに適せざるは無く且つ其水は永久停滯して新陳交代するの期なきが故に汙泥沈澱して水質腐敗したらんが如し、

以上述べたるが如く公卿の翫弄物となりたるが爲に長篇韻文は全く跡を絶ち短篇韻文のみ流行したるに相違なしと雖ども猶此外に短篇韻文を成立せしめたる一大原因ありて存するなり、何ぞや曰く我邦の韻文は敍事よりも敍情を主とせり、敍情よりも敍景を主とせり、語を換へて言はゞ錯雜にして變化多き人間社會の現象を摸寫せずして專ら簡單にして靜默なる天然を摸寫せしが爲なり、更に語を換へて言はゞ吾人々間が主觀的に有りて善惡混淆する無數の觀念の分析、又は其觀念が表發して外部に生じたる客觀的の事實關係等を以て材料となさずして偏に山光水色若しくは花木竹草の如き幾多の長時間に微妙の變動を成就する客觀的の萬象が直接に吾人の心裡に生じたる表象を取りて、これに極めて僅少の理想を加へ以て一首の韻文を構造するに過ぎざりしを以てなり、（短歌にして人情を寫す者は只戀歌等の一部分に過ぎず）然り而して我韻文の彼れに向はずして常に此れに出でしは矢張最初に擧げたる二原因に由る者にして國家泰平を謠ひ人民無事に安んずる時は錯雜變幻極りなきの人事を見聞すること少く、從ひてこれに刺擊せらるゝことも無ければ取りて以て詩歌の題目となさんとの思考は寸毫も心に浮ぶまじく、況して他に尤優美高尚なる天然の景物ありて常に其眼邊に横はるをや、（此外漢詩も亦天然を寫すを主とするを以て多少は其影響をも受けしことあるべし）西洋にて上古より競爭戰鬪の絶えざりしは各邦國間の侵略併呑互に盛なるより起りしも

のなれば我邦に此種の爭なきは當然にしてそは前にも述べたるが如し、其次に西洋にて改革變亂等烈しかりしは宗教に由る者亦多し、我邦にても佛教は廣く行はれたれども曾て是が爲に社會の秩序を亂す程の慘酷殺伐なる光景を現出せしことだに無ければ、つまる處人間の不幸は佳人才子の不遇なる位に止まり、それさへ天涯に沈淪するの類に非ずして僅かに一夜の契に後朝の恨を述べ一年の久闊に千秋の思をなすが如き些々たることを歌謠に作りて得意とするに至りたり、而して人世無量の變化を寫し出さんと欲すれば長篇に由らざるべからざれども天然の雅景を摸し來るには數十字の短篇にても可なるべし、否、後者は寧ろ短篇に傾き易きものなり、蓋し一草一木を分離して歌題と爲すべく、はた全體の光景を敍し盡すとも語らず笑はざる無心の山川は雲飛び水行くが如き規則的の變化の外に更に變化なるものなければなり、是れ卽ち短篇韻文の成立し得る所以なり、されども此原因は前項の原因と相俟ちて互に原因結果を爲す者なれば上流社會の人、短篇韻文を以て娛樂とする以上は是非とも簡單にて盡すべき敍景的の意匠に由らざるを得ず、よし又敍事的の韻文を爲さんと欲するも爲し得ざるべし、何となれば人世を敍するには必ず善惡忠奸貴賤賢愚等兩々相對比せざるべからざるは勿論なれども彼等は彼等自身の外に忠も知らず奸も知らず賢も知らず愚も知らざればなり、故に人情を敍するものとても戀歌、離別歌、羈旅歌の如き最簡單なる觀念の範圍を越ゆること能はざりしなるべし、（天然を寫すと人事を敍するとの可否は別に論あれどもこゝに言はず）

短歌の盛運を極めし所以は前二項に大別して略論したるが如くなれども猶附加の原因一個條あり、卽ち我邦の事物は皆規模の小なる事也、富士峰高しと雖も遠州洋廣しといへども更に之を世界の高

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com